

震災からの復興活動に取り組むリーダーを、
短期・中期・長期の3つのフェーズで支援します

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders - Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート (2012.1.12-2012.2.11)

1 右腕インタビュー



「日本に寄付したい」という想いをつなぐ

—なぜこのプロジェクトに右腕として参加したのか聞かせてください。フィリピンのマニラに13年間住み、そのあと去年の年末から半年くらい地元福岡で友人の選挙を手伝っていました。それが一段落して、その時に「こういう右腕のお仕事があるけれどどう？」という話を知り合いつてにいただいたんです。もともと震災に関わる仕事をしたいと思っていたし、カタリバのことも「ワークショップを事業にしている面白い団体だなあ」とずっと知ってはいたので、それらが上手くマッチしたという感じですね。

—マニラに13年いた時は、何をされていたのですか。

演劇ワークショップという、即興演劇を社会的な問題とも絡めたりする活動をしている人たちがけっこう海外にいて。フィリピンには「フィリピン教育演劇協会(PETA)」というその手の老舗の劇団があるんですけど、そちらにインターンに行き、そのあとは現地で日本のNGOのマニラ駐在員などを経て、国際協力関係でJICA(国際協力機構)や日本大使館でNGOと政府機関の連携に関わっていました。あとは、通訳・翻訳、テレビや演劇・映画のコーディネートなどをしていましたね。

—日本で働いてきた他の方たちとは、違う着眼点を持っていらっしゃるそうですね。

代表の今村さんにも「ぜひ、そういう風に違った視点で気づいたことを教えてください」と言われていて。フィリピンに行く前にもピースボートや通訳の仕事で色々な国に行ったりしていたので。海外に長期間いると客観的に日本が見えてくる、というのは、やっぱりあります。

—NPOカタリバの中にいて、何か客観的に見えたものや感じたことはありますか。

本当にイノベティブで素晴らしいことをしている団体だということ。そして、そのすごさに本人達が気づいていない部分があるのかな、ということ。世界に出しても絶対恥ずかしくないぐらいのユニークさだったり、高校生のモチベーションを上げて人生を変えていく作用だったり、カタリバの事業はそういうものを持っていると感じます。海外から資金を集めてくるだけではなくて、それをちゃんと伝えたいですね。

—リーダーである今村久美さんは、どんな方ですか。

ユニークで勢いがあり、突破力がある人だなあ、と思います。私は割と参謀タイプの人間なので、トップに立つと妙に責任を感じて緊張してしまって。2番手あたりでチームでやるのが好きなんですよね。そういう意味で、この人だったら面白い関わりになりそうだな、いい組み合わせかもしれないな、と思いました。

—それはすてきですね。毎日、1日の仕事の流れはどのような感じなのですか。

私は主にこの事務所にいますが、時折東北へ出張に行ったりもします。東京では、メールで海外の色々な財団や情報をアップしているアメリカの寄付サイトと連絡を取ったりしていますね。それから、団体や事業紹介も英文化していくということをやっています。英語版のホームページ制作も進めています。

—実際にやっていて、どんなところにやりがいを感じますか。

海外でもたくさんの方が今回の日本の震災に心を痛めて、何かしたいと思っていて、それを寄付やチャリティーイベントなどの形で集めるという動きがあります。そして、集めたお金を「さあどうしよう」って思っている方がいっぱいいるんですね。それは、個人から財団・機関まで。規模は小さくても、できれば直接現場で動いている人達に渡したいという方々もいる。支持したいプロジェクトがあれば、どんどん出したいと思っている人は潜在的に多いです。もちろん、震災関連で動いている日本の人たちもファンドは必要なわけで、そこをうまく繋げられそうな手応えを感じる時は、やりがいがありますね。

—右腕として今後やりたいことはありますか。

ストレートですけど、出来るだけ多くのお金を集めて、被災地に役立てたいですね。あと、カタリバ本体も非常にユニークな事業をやっていると思うので、そこを上手く海外に向けて発信していけたらなあと思います。現地の方や社会起業家の方達が、「これは、全く新しいノベーションをするチャンスだ」「これを使って震災前より良い社会を生み出すことが自分たちの義務だと思う、それをしないと亡くなった方達に顔が立てられない」と言っていて。それはすごく印象的でした。なので、そういう心意気でやりたい。ただ1+1=2というよりも、かけ算だったりするのかなあと。日本が大きく変わっていく転機だと思うので、それに何らかの形で貢献出来ていけたらなあと思います。

右腕：高山リサ氏

「放課後学校「コロボ・スクール」プロジェクト(女川町・大槌町)」

ピースボートをはじめ、国際交流、国際協力、舞台芸術の分野で企画運営、通訳・翻訳に携わる。フィリピンのマニラに13年在住し、日本およびフィリピンのNGO、日本大使館、JICAと連携して開発プロジェクトの形成・運営、関係者向けの研修等を実施。経験を生かして現在は海外ファンドレイジングを中心に担当。カタリバ全体の英語での情報発信も行う。

2 地域を超え、事業を展開



■ 地元の塾講師・NPO・教育委員会・学校の協働による学習支援

塾講師の先生方・有志の方々・ボランティアの方々・教育委員会・校長会・学校・遠くから応援する寄付者の方々などが、みんなで協力してつくりあげている、日本で初めてのコラボレーションスクールが女川町・大槌町に生まれています。放課後学校「コラボ・スクール」です。

■ 勉強場所の不足…女川町の問題解決

石巻や気仙沼にも大規模な被害がありました。女川町は住居倒壊率83%、学習塾も9割が津波で流されています。避難所は消灯時間が早く、子供たちは、勉強したくても学ぶ場所がない状況でした。これを受け、NPOカタリバが避難所として使われていた校舎を借りて、2011年7月に立ち上げたのが1校目のコラボ・スクールである女川向学館です。

■ みんなで協力する女川向学館の仕組み

教員には、被災した地元の塾講師の方々などを雇用。20代から60代の13人が働いています。また、ボランティアの大学生や社会人による個別のサポートも行っており、子どもの学びや気づきをみんなで応援していけるような仕組みを整えています。

場所の提供は、女川町の教育委員会。運営の手伝いはPTA関係者が行っています。資金は、行政の資金でなく、団体や個人などの応援者から集まった寄付金によって運営されています。

■ 子どもたちへの効果

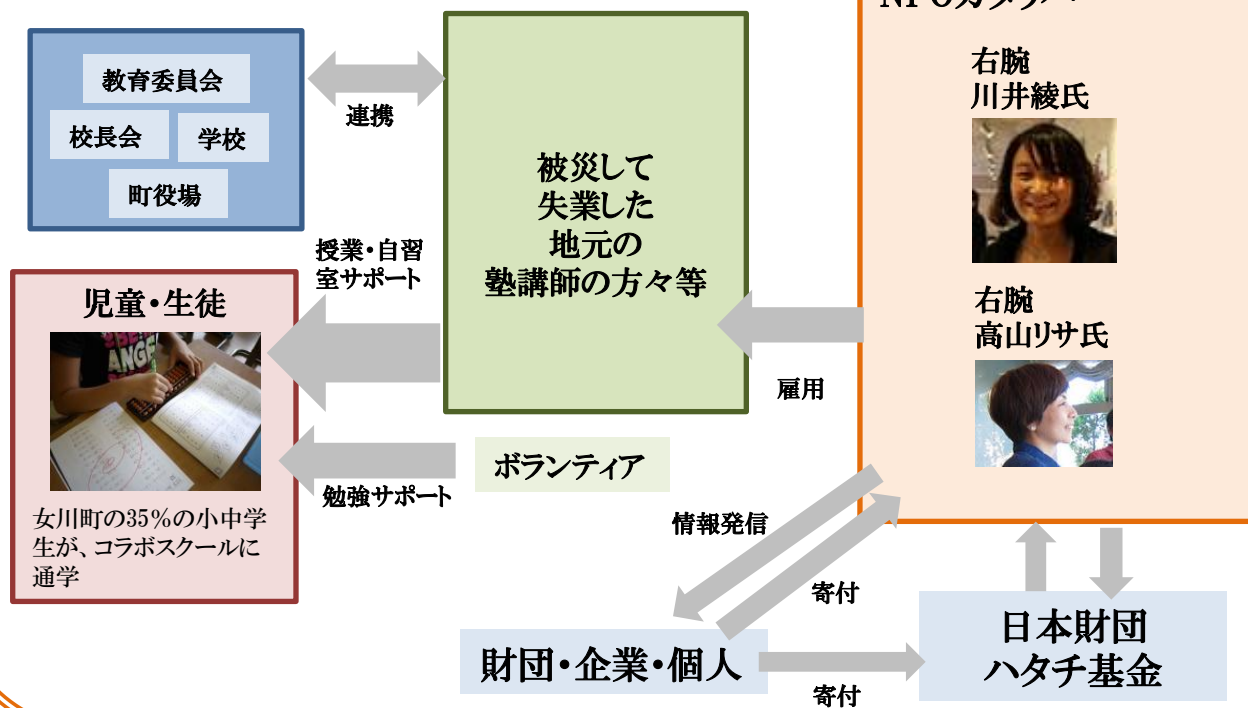
女川向学館には、現在は小中高生約230人が通学。週6日、夕方から英語・数学・国語などを無料で教えています。震災直後と比べて、女川向学館に通う生徒たちの勉強時間は2.7倍に。子供からは、「被災した直後は、勉強などできる状況ではありませんでした。今では向学館できちんと勉強できています。特に、ボランティアの方が個別で指導して下さるので、苦手な教科もだんだんと分かるようになってきました」という声もあるそうです（「コラボ・スクール」ホームページより）。

■ 2校目のコラボ・スクールを大槌町に設立

大槌町の教育委員会や岩手県内の大学と協力し、2012年1月に本開校したのは2校目の大槌臨学舎。ここでは、高校受験を控えた約80名の中学校3年生が勉強中です。この2校目の立ち上げに弾みをつけたのが、海外からの資金調達を行っている右腕の高山リサ氏です。また、もう1人の右腕の川井綾氏は、大槌臨学舎の運営体制確立に現在取り組んでいます。

女川向学館

特定非営利活動法人 NPOカタリバ



3 今月のトピックス(2012.1.12-2012.2.11)

例年にも増して雪が舞い、冬の深まりを感じる日々。右腕派遣は、次のフェーズに入りました。35を超える派遣先に加え、新たなプロジェクトが次々と生まれ、その活動範囲、テーマが広がっています。現地に入り込んでいる右腕の役割は多種多様ですが、事業を軌道に乗せることで、少しずつ彼らの役割を地元の方々に引き継ぐ動きも生まれ始めています。単に事業をつくるだけでなく、持続可能な組織体制をつくることに奔走している彼らの姿は多くの方々の共感を呼び、多くのメディアに取り上げられたり、新たな右腕候補者が手を上げたりと、自然発生的な新しい潮流が生まれています。依存することなく、民間主導で地域をつくるこれらの動きを共に伸ばしていく、当事者意識を持った方々が集うコミュニティが醸成されつつあります。

■ みちのく仕事マッチングフェア(2月4日)

■ 想いある160人が右腕としての参画を求め、集う

前回のマッチングフェアから3か月、続々と新しいプロジェクトが生まれる現地より、14人のリーダーにお越しいただきました。会場は、デジタルハリウッド大学大学院秋葉原キャンパス様にご協力いただき、復興に想いを寄せる160人もの方々が集まりました。同時に、海外メディアも含めた多くのメディアに当日はお越しいただき、盛況のうちに幕を閉じました。

10月に行われたマッチングフェアで130人であった参加者が、時間の経過と共に増加していることは、驚くべきことです。当事者意識を持って心を寄せる方々が集い、右腕として新しく参画することで、新たな事業を生み出していく。それが呼び水となって新たな参画者が生まれ、チャレンジが連鎖していく。東北を舞台に、挑戦のエコシステムが生まれています。

■ 参加プロジェクト一覧

- ・地域の未利用資源活用とコミュニティ再生プロジェクト
- ・バイオマスエネルギー事業立ち上げプロジェクト
- ・放課後スクール「コラボスクール」プロジェクト
- ・雄勝アカデミープロジェクト～こどもの教育支援を通じた復興～
- ・一般社団法人「東の食の会」プロジェクト
- ・スペシャルニーズを持つ方々の「未来創生」プロジェクト
- ・大槌町地域支援員配置プロジェクト
- ・東北Rokuプロジェクト
- ・RCF復興支援一無
- ・岩手県釜石エリア 雇用マッチング支援プロジェクト
- ・Mission Ishinomaki-K2 ～石巻復興支援プロジェクト～
- ・復興応援団プロジェクト
- ・亘理町グリーンベルトプロジェクト
- ・つなプロ気仙沼

■ 明日の事業を創るために

高齢化比率が25%(沿岸部では35%)にも達する東北地方において、若く有能な人物が新しい事業に携わるということのインパクトは現在、非常に大きいものとなっています。ETICでは、引き続き、現地で求められている人材を、適切なタイミングでマッチングすることを通じて、新たな事業を創る後方支援を続けていきます。



■ リーダー座談会(2月5日)



■ 右腕の役割とは

東北の地より3名のリーダーにお越しいただき、右腕派遣の枠組みについてダイアログを実施いたしました。当日は、右腕が「何でも相談できるよいパートナーになっている」、「リーダーが考えたビジョンをかたちにする役割を担っている」、「働き方を通じて地元の方々に、刺激を与えてほしい」などと、様々な右腕の役割について議論が交わされました。

■ 地域の外から人が入っていくことの意味

あるリーダーの方は、「事業を大局的に見ながら、仕組み化していくこと」が大きな意味だと考えています。そして、それを支えていくために環境をつくるのがリーダーに求められることとおっしゃっています。単にやりたいからやるのではなく、冷静に、できることを考えて、「この部分で貢献できる」という方にこそ右腕として来てほしい。この機会を使って、どんなスキルが身についで、どんな自己実現ができるのかを、素直に教えてほしい。右腕の存在に依存するのではなく、地域の帆走者として、共にプロジェクトを創っていく者として、右腕の役割が求められています。

活動 エリアマップ

※ 1 番号は、右腕の参加プロジェクトです。



- 1 「東の食の会」プロジェクト
- 2 キッズドア「タダゼミ&ガチゼミ」
- 3 ふらっとーほく プロジェクト
- 4 地域創造基金みやぎ
- 5 復興支援リサーチプロジェクト
- 6 コミュニティ・ワーク創出事業プロジェクト
- 7 仮設住宅・第二のふるさと創出プロジェクト
- 8 放課後学校 コラボ・スクールプロジェクト
- 9 つなプロ気仙沼
- 10 気仙沼・情報発信力アッププロジェクト
- 11 仮設住宅で生活する子どもたちの教育支援プロジェクト
- 12 東北 Roku プロジェクト
- 13 コミュニティバス運行プロジェクト(ぐるぐる応援団)
- 14 地域の未利用資源活用とコミュニティ再生プロジェクト (つむぎや)
- 15 なつかしい未来商店街プロジェクト
- 16 地域看護・地域福祉 後方支援プロジェクト
- 17 大船渡仮設住宅支援員配置プロジェクト
- 18 復興応援団
- 19 みやぎ連携復興センター
- 20 南三陸復興アトリエプロジェクト

2012年2月11日現在、右腕へのエントリー者数は144名、そのうち68名を右腕として現地へ派遣しました(緊急支援フェーズ15名、リーダー支援フェーズ53名)。これまでに派遣を行った累積の派遣プロジェクト数は31。産業復興、医療・福祉、教育、コミュニティ支援、中間支援と、多岐にわたるテーマを持つプロジェクトへ、人材を派遣しています。また、2週間～1か月の期間、プロジェクトの推進にコミットする「短期プロジェクトスタッフ」は34名となりました。

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、現在のご寄付の総額149,819,939円のほか、民間企業や国内外の財団から引き続き支援に関する照会をいただいております。

しかしながら、右腕人材の派遣をはじめとして、現地で復興の取り組む人々からの支援のニーズは予想以上に高く、右腕派遣の目標を「50件のプロジェクトに200名」と当初の倍に設定しなおしたのをはじめ、各プロジェクトへのハンズオン支援の充実、新たなプロジェクトのインキュベーションやスタートアップ支援など、震災復興リーダー支援プロジェクトの全体像の再構築に取り組んでいるところです。

目標の変更に伴い、総予算額も3年間で6億円以上の規模となる予定で、改めてファンドレイジング戦略の強化を実施してまいります。

皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えをはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしくお願い申し上げます。

信頼資本財団「震災復興リーダー基金」

≫ <http://www.shinrai.or.jp/fukkou-shien/etic/>

連絡先・お問い合わせ先

◆NPO法人ETIC.内

震災復興リーダー支援プロジェクト 事務局

(担当:山内・辰巳)

東京都渋谷区神南1-5-7

APPLE OHMIビル4階

mail: fukkou@etic.or.jp

Web:

<http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>